

---

**流転恐怖 傑作選 『首都高最速都市伝説決定戦』**

資源?世

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流転恐怖 傑作選 『首都高最速都市伝説決定戦』

### 【Nコード】

N9367Z

### 【作者名】

資源?世

### 【あらすじ】

てけてけからの頼みで、首都高最速都市伝説決定戦にできることになったソアラ。果たして彼らは並み居る強豪を打ち破ることができるのだろうか？

はつきりいって俺はそこまで運転に自信はない。特に夜中の運転なんて怖くてたまらないものだ。だが、世の中の不条理というやつは、そういうのを逃してくれるほど甘くはないようだ。

ブロロロロオ…… 二人乗りをしたバイクが一台、俺達の横を通り過ぎる。すれ違いざまに、そのバイクからフルフェイスのヘルメットがおちた。それに気づいたメリーさんは、すぐに通り過ぎていったバイクに声をかけた。

メリー「あ…… ヘルメット落としましたよー！」

???「あ、すみません！ すぐにとりにいきます」

バイクとは既にかなり距離が離れていたのに、声はすぐ近くで聞こえた気がした。不思議な感じがしたが、バイクはすぐに戻ってくる。

運転手「すみません！ どこかにぶつかったりとかしてませんか？」

メリー「大丈夫ですよ。はい、ヘルメット」

そういって、メリーさんは落ちていたヘルメットを運転手に手渡す。

メリー「それにしてもヘルメットって、意外に重いんですね」

運転手「え？ あ、いや…… ヘルメット自体はそんなに重くはないんですよ。ただ……」

後ろの男「ヘルメットの中に俺の首が入ってるから、重いんですよ」  
そういつて、後ろに乗っていた男が、姿をみせる。運転手の影にな  
って気づかなかったが、その男には首がなかった。都市伝説『フル  
フェイス・ヘルメット』だ。

メリー「え？ あ…… く、首……？」

首のない男は、フルフェイスのヘルメットを被る…… いや、首の  
上に乗せたというべきか。運転手と後ろの男は、「また落とすやが  
つて」とか、なにやら口げんかをしつつ、メリーさんに軽く手をあ  
げて挨拶をすると、再び走り出していった。

メリー「うう…… く、首…… 首……」

あまりにショックが大きかったのか、バイクが走っていった方を指  
差しながら、俺の服の裾にしがみついていた。その目には涙をため  
ながら、言葉にならない言葉を発している……。

（ 、 、 ）「やれやれ……。まあ、あっちのでも見て、気を紛ら  
しな」

俺は、赤いスポーツカーが止まっているところを指差す。メリーさ  
んは、何？ といった表情をしつつも、言われたとおりに赤いスポ  
ーツカーに目をやる。

赤いスポーツカーには、赤いコートの女がサングラスをかけて、ポ  
ーズを決めていた。車の横には二人のケバいいースクイーンが妙な  
ポーズをとって、周囲を威嚇…… いや、魅了…… やっぱ威嚇か  
…… をしていた。

口裂け女・三女「私、キレイ？」

そうやってレースクイーンの格好をした口裂け女が振り向けば、誰もが目を逸らす。耳を塞ぎ、聞こえなかったフリをする。むしろ、見てしまったことを記憶から消去しようと必死になっている。

口裂け女・次女「ふふ…… 今日はお祭り。そんなところで口を裂いたりしないわよ。だから、思う存分、私達の美しさへの賛辞を送るがいいわ！」

観衆たち「……………」

しかし、誰も何もいわない。見たこと、聞いたことを忘れようと必死なのが、こちらにも伝わってくる。

口裂け女・長女「今日のギャラリーはウブね。もっと素直にならなくちゃ、ダ・メ・だ・ぞ！」

そういつて、ウィンクを投げる口裂け女……。その瞬間、ギャラリーたちはあまりの恐怖にやられたか、バタバタと倒れていった。いや、それなりに距離をとっている俺達も被害は及んでいる。

( ; ; ) 「や、やべえ…………… 吐き気が……………」

メリー「あうう…………… 私、もうダメ……………。夢に見る……………。一週間くらい眠れないよ……………。もう、なんで、あんなの見せるの!？」

メリーさんが、涙ながらに抗議の声を上げる。

( ; ; ) 「いや、恐怖を上塗りするには、より一層の恐怖をと思ったんだが……」

メリー「レベル高すぎだよ！　トラウマものだよ！　あうう……」

てけてけ「あ、あの……　な、何やってるんですか？　出来れば、レース前に戦意喪失しないでください……」

俺達がふざけていると思ったのだろうか？　叱責をしにきたのは、このレースに俺達を巻き込んだてけてけだった。

てけてけ「そ、それですね……。あの……　これを……」

そういつて、彼女は、『首都高最速都市伝説決定戦』と書かれたたすきの一つを俺に差し出す。

( ; ; ) 「これは？」

てけてけ「出場選手はこれをつけてください。あと……　ソアラも……」

彼女は、車の上に横座りしているソアラに声をかける。声をかけられたソアラはといえば、ぶすつとした表情で空を見上げたままだ。

ソアラ「……」

てけてけ「ねえ……　まだ、怒ってるの？」

ソアラ「別に……　怒ってないわよ？　ただ不機嫌なだけよ」

てけてけ「ご、ごめんなさい！ でも、出場登録が済んでるのにレスを棄権できないのよ！！」

ソアラ「知ってる……」

てけてけ「わ、わたしだつて、ソアラを巻き込みたくなかつたけど…… 出場予定のてけてけが…… まさか、とことこと駆け落ちするなんて誰も思ってもなかつたのよ！！」

メル「とことこと？」

(´、´)「てけてけの逆バージョンだな。上半身のない奴らだ」

メル「……自分が持っていないものを…… 持っている人に惹かれる……。姉様が言ってたとおり……」

(´、´)「そういう意味なら、ものすごい惹かれ方だったろうぜ。なにせ、上半身と下半身だからな」

ソアラ「他のてけてけが出場条件の時速100kmに到達できてないのも知ってるし、他に頼めるのがないのも知ってる……。だから、こうしてここにいるんじゃない……」

てけてけ「う、うん……」

ふっと、ソアラの姿が車の上から消えると、ふわりと俺達の目の前に現れる。

ソアラ「はい……」

そっぽを向きながらも、手を差し出すソアラ。

てけてけ「え？」

ソアラ「え？ じゃないでしょ？ たすき！ つけなくちゃいけないでしょ？」

てけてけ「あ、ありがとう！」

ソアラ「いい？ 今回だけだからね！」

（ ・ ・ ）「やれやれ……」

まったく、ソアラは素直じゃないというか、なんというか。悪い子じゃないのは確かだけどな。

ソアラ「で、今回の出場選手は？」

てけてけ「まず、あそこのおばあさん」

杖をついた老婆を指差す。見た目はただの婆さんのようだが、こんなところにただの老婆が来るわけない。

（ ・ ・ ）「100kmババアか」

てけてけ「そうです。時速100kmで走りシニア部門最速といわれています。怖いのはただ早いだけじゃなく、100kmババアに追い抜かれると事故を起こしてしまうことです」

ソアラ「気をつけないといけないわね」

てけてけ「次に、あそこのバイク集団の真ん中の人」

バイク集団…… つーか、珍走団か。もつとも、こんなところにいるだけあって、ただの珍走団じゃない。なにしろ、全員、首がない。

てけてけ「首なしライダー達のチーム『ルイジンエン累神炎』のリーダー、通称・珍犯児！ 普通に走っても早いのに、卑怯な手を好んで妨害を仕掛けてくることが多いです。なにより追い抜かれると事故を起こしてしまいます」

ソアラ「気をつけないといけないわね」

てけてけ「まだ来てないみたいですが、人面犬もエントリーしてます」

(´・`・´)「まだいたのか、人面犬」

てけてけ「犬でありながらも時速100kmで走ることができ、障害物などに対する反応速度は人間よりも数段上です。更に人面犬に追い抜かれると事故を起こしてしまいます」

ソアラ「こいつも？ こんなのはかりね……」

てけてけ「最後に…… 口裂け女・長女。時速100kmで走れるみたいですが、持久戦に弱いため赤いスポーツカーに乗ってます。追い抜かれても何もないですけど、化粧が厚くてキモいです……」

(´・`・´)「目を合わせないようにしないと。走っている最中に吐き気を催しちまうぜ」

ソアラ「ある意味、一番、危険かもね」

メリー「あってるような、間違っているような……」

あれこれと作戦会議をしている間にレースの開始時間が目前に迫ってきたようだ。選手や観客だけでなく、運営委員のたすきをかけた都市伝説があれこれと動いていた。

スピーカーから、独特のキーンという音が響くと、アナウンスが流れ始める。

ペラペラ男「全国、一千万の都市伝説諸君！ 今宵も都市伝説最速決定戦の時間がやってきたぞ！ 実況はお馴染み、どんな隙間にも入れる私、ペラペラ男！ 解説はおなじみの風化老人さんです！」

風化老人「あー…… どうも…… わしが…… あー、その……

風化…… ろっじ」

ペラペラ男「さあ、気になる今回の出場選手の紹介だ！！」

風化老人が言い終わるより先に、さつさと話を進めてしまうペラペラ男。風化老人は、風化老人で、まだぶつぶつと喋っていた。なんでこんなのを解説に呼んだのか不思議でならないところだ。

ペラペラ男「トップバッターは振り込め詐欺グループを地獄の底まで追いかけて、金を奪ったという100kmババア！ その執念はここでも生かされるのか！？」

100kmババア「年金だけじゃ、もう生活できんわい」

観客『おおおおおおお！！』

ペラペラ男「ブームは嵐のように過ぎ去ったが、まだまだ健在・人面犬！！　ブームが過ぎ去るスピードに負けない走りを見せてくれ！！」

人面犬「ほつといってくれよ……」

観客『おおおおおおお！！』

ペラペラ男「そのバイクはまさかハーレーなのか！？　いいや、そんな生易しいものじゃない！　史上最速のパチモン『ユーレー・ダビッドソン』をひっさげて登場は、首なしライダー！！　チーム『累神炎』のライダーとしての走りを見せてくれ！」

首なしライダー「……………」

首なしライダーは、画用紙に『ム血義理だぜ！！』と書いて、大きく掲げた。それにあわせて、おそらくは仲間の首なしライダーたちが、同じように画用紙に『総長最高！』だの『総長、シビレル！！』などと書いて掲げていた。口がないからしゃべれないようだ。

（　　、　　）「ムチギリ…………？　仏血義理と書こうとして、漢字間違えてるのかよ?!　まあ、無知なのは確かだから、間違っていないかも知れないが…………」

ソアラ「頭ごと、脳みそ落としてる奴らだしね」

ペラペラ男「都市伝説界において、この名を知らないものはいない

だろう……。この世でもっとも猛威をふるい、もっとも残虐で、もつともケバ……。美しかった三姉妹の長女がついにお出ました！  
口裂け女ー！！」

口裂け女「私の美しさに見惚れていなさい！！　そうすれば、負け  
たときの言い訳ができるでしょう？」

観客『おおおおえええええ……。！！』

隠れて観客達は次々に吐いていた。まあ、仕方ないことだ。

ペラペラ男「おええ……。あ、失礼！　えー……。今大会、出場予  
定のてけてけに代わり、急遽、伝説の名車が登場だ！！　早く走る  
？　そんなのナンセンス！　前に行く奴は、全て首を切り落とせ！  
首ちよんソアラーー！！」

ソアラ「ちよっ！　なによ、そのアナウンス！！　まるで私がギロ  
チン娘みたいじゃないの！！」

てけてけ「ま、まあまあ……。落ち着いて……。ギ、ギロチン娘だ  
って、そんな悪口じゃ……。ないんじゃない？」

（、、）「そうだよ、気にするなよ、ギロチン娘。むしろ、格  
好よくな？」

ソアラ「……。あはは、そうね。でも、今日、私、とっても機嫌悪い  
のよ。……。二人とも首なしライダーの仲間入りしたい？」

顔は笑っているが、地の底から響くような深く深い声で、俺とてけ  
てけを威圧するソアラ。一発BADエンドの選択肢を前にしたとき

のような緊張が周囲を支配する！

( ; ; ) 「こ、こらー！ ナレーター、うちのソアラは、そんな変な子じゃないぞ！」

てけてけ「そ、そうですよー！ ソアラは、首を切ったことはないんですから……！」

震える声でナレーターに抗議っぽいものをしておく。まあ聞こえてはいないだろうが、パフォーマンズでもしなくちゃ命が危険が去りそうになかったのだ。

俺たち出場選手は係員の誘導の元、スタート位置につく。周囲の空気がからか、いつになく緊張感が張り詰めてゆく。

ペラペラ男「さあ！ 出場選手が全員、スタート位置についたぞ！」

観客『おおおおおおおおおおおおお！！』

並びは2列。首なしライダー、人面犬、100kmババアが1列目に並び、2列目に俺達と口裂け女が並んでいる。

俺の車には、ソアラとてけてけがアシスタントとして、一緒に乗っている。走るのは高速道路だからアシスタントが必要というわけではないが、競争相手が一癖も二癖もある都市伝説達である。過去のレース記録などを知っているてけてけのアシストが重要なのだ。

てけてけ「あ、あの…… 無理に勝とうとしなくていいですから…… とにかく後ろにつかれないことと、追い抜かれないようにしてくださいー！」

( 、 、 ) 「基本、追い抜かれたら事故確定な奴らばかりだからな。こいつは気をつけないといけねえな」

ソアラ「まったく…… 板金コースだけは勘弁してね」

そして、レースの時間がきたようだ。

ペラペラ男「準備はもういいか!? さあ、10秒前!」

観客『……5! 4! 3! 2! 1!』

ペラペラ男「スタート!」

その掛け声と共に首なしライダー、100kmババアがスタートダッシュを決める! 続いて、俺の前を人面犬、口裂け女が走る。俺達は、最後尾を前と距離を保ちながら走った。

( 、 、 ) 「まずは様子見というのか」

てけてけ「スピードに注意してください。前に合わせていたらいつの間にか時速100kmを越えていたということもありますから。そうになったら、とっさのことに反応できないなんてことになりかねませんからね」

ソアラ「スピードは私が見ておくわ」

( 、 、 ) 「頼んだぜ!」

スピードの確認はソアラに任せて、俺は前に集中する。今のところ、

首なしライダー、100kmババア、人面犬、口裂け女で、一直線に並んでいる。まだ様子見ということか、攻める様子はない。

ペラペラ男「トップは首なしライダー！ 追いつがる100kmババア！ しかし、まだ攻めないで様子を見ている！」

風化老人「あー…… まだまだ先はー…… 長いですからねー……

100kmババアはー…… 自分の足でー…… 走っているわけー…… やはりー…… 動悸、息切れがー……」

ペラペラ男「おっと！ 口裂け女が人面犬を抜いた！ しかし、これで、前と後ろに事故フラグを立てたことになるぞ！？」

風化老人「えー…… 口裂け女のー…… あー…… 意地というか

ー…… プライダーー…… ですかねー……？ 都市伝説のー…… 知名度のー…… 一番はー…… 自分であるとー……」

ペラペラ男「人面犬の後をぴったりと首ちよんソアラが追いつがる！！ ギロチンか！？ ギロチンのごとく、人面犬の首を狙っているのか！？」

ソアラ「だから、誰がギロチンよ！！」

（ ）（ ）「あのナレーター、首ちよんソアラに恨みでもあるのかよ？」

今のところ、時速90km前後。目が慣れてきたためか、そんなにスピードを出している間隔はない。もうすぐコースの中盤くらいに到達するころだ。

順位は、現在、怒涛の追い上げを見せた口裂け女がトップ。次に首なしライダー、100kmババア、人面犬、俺達となっている。今のところ、ぶつちぎってる口裂け女以外は誰も様子見をしているのか安定したレース展開を見せている。

(´・`・´)「ん？ 人面犬、スピード落ちてきてないか？」

ソアラ「え？ そういえば…… 今、時速70km?! 先頭集団が遠くに行ってると思ったけど、人面犬のペースが落ちていただけみたいね」

人面犬「ほつといてくれよ……」

(´・`・´)「おつと、聞こえちまったようだな。でも半分地点でこれだと、ゴールまでもたないんじゃないか？ レースにでる犬種とかなら持久力ありそうだけど、人面犬って雑種っぽいし」

人面犬「ほつといてくれよ……」

ソアラ「ちよつと！ 雑種なの気にしてるみたいじゃないの！」

(´・`・´)「あ、すまない……。でも、そんなに気にするなって人面犬ってだけでもすごいんだからさ。ブームは去ったけど……」

人面犬「ほつといてくれよ……」

ソアラ「あつという間にブームが去った人面犬にそれはないでしょ！」

(´・`・´)「悪い、悪い。そんなに気にしてたのかよ？ お前っ

て、老けたおっさんの顔してる割に、傷つきやすいのな……」

人面犬「ほ、ほっといってくれよ……」

ソアラ「ちょ、ちょっと！ 人面犬って、これで繊細なので有名なのよ?!」

( ; ; 、 ) 「やべえ……。ついちゃならない場所をつついちま  
ったか？ それとも、単に「ほっといってくれよ……」しかいえない  
のか？」

俺のそのいらぬ一言を聞いた瞬間、人面犬はわなわなと震えだす。  
その瞳には何か光るものが溜まっていた。何か、まずいことをした  
かも知れない。俺はそう思って声をかけようとするが、人面犬は「  
ほっといってくれよ!」と悲しみの叫びをあげながら、猛スピード  
で先頭集団に突っ込んでいった。

( ; ; 、 ) 「走り去るときに…… 気のせいか、目から光る液体  
が溢れるのを見た気がするぜ……」

ソアラ「なにやってるのよ?」

ペラペラ男「おーっと！ ここにきて、人面犬が追い上げる!!  
あっという間に100kmババアに迫る！ 迫る!! しかし、1  
00kmババアも負けていない！ ここにきて激しいレース展開だ  
!!」

人面犬に少し遅れて、俺達も先頭集団においついた。まあ、追いつ  
くといっても、奴らが見える範囲にはいったというだけだが。

と、そのとき、どういいうわけか、首なしライダーがUターンをした。

( ; ; ; ) 「あれ？ 首なしライダーが逆走したぞ！？」

ソアラ「脳みそないから、自分が何やっているかわかってないんじゃない？」

てけてけ「ち、違います！ あれは、罨です！ 早くスピードを落として！」

( ; ; ; ) 「罨？」

俺は言われたとおりにブレーキを強めに踏んでスピードを落とす。当然ながら、あつというまに前との距離は広がってゆく。

首なしライダーは人面犬の後ろまで走ると、再びUターンをする。そして……

一気に加速して、100kmババアと人面犬を追い抜いた！！

ペラペラ男「あーっと！ 遂にでた！！ 首なしライダーの殺人走行、リターン・クラッシュャーだ！！」

風化老人「あー…… ついにー…… やりましたねー……。自らー

…… 逆走すること…… 追い抜かれる状況を…… 無くし

てー…… そこからー…… 一気に追い抜いてー…… 事故をー…

……」

首なしライダーに追い抜かれた100kmババアと人面犬は、急にフラフラとしだし、あとはもうあつというまの出来事だった。

ペラペラ男「追い抜かれた100kmババアがスピンだ!! そのまま、人面犬と衝突!!」

100kmババアは、転げるではなく、クルクルとまさに車がスピ  
ンしたかのように、回転しながら人面犬に激突した!

( ; ; 、 ) 「って、なんで人間がスピンするんだよ!? 普通、  
転ぶとかだろ? スピンって、おかしいだろ!？」

てけてけ「と、都市伝説ですから…… そついう常識は…… あの、  
ごめんなさい」

ソアラ「じ、事故…… た、助けないと!!」

( ; ; 、 ) 「え? あ、ああ!」

俺が事故現場の近くに車を止めると、ソアラはすぐに100kmバ  
バアと人面犬の元に走りよっていった。

ソアラ「大丈夫?!」

人面犬「ほ…… ほつといてくれよ……」

( ; ; 、 ) 「いや、この状況でほつといちゃダメだろ?」

100kmババア「年寄りになんてことするんだい……」

ソアラ「大丈夫みたいね?」

さすがに都市伝説である。時速100km近くで壁に突っ込んだわりにピンピンしている。本当に頑丈な奴らだ。

「トン、トッソ、トソソ、トン、カラ、トン！」

（、、）「ん？」

そこに妙な歌を歌いながら、包帯をぐるぐる巻いた奴らが自転車に乗ってやってきた。

「???」「医療班のトンカラトンです！ 要救護者はどこですか？」

ソアラ「あそこよ！」

ソアラが指差した先を確認してから、トンカラトンはトランシーバーで連絡をする。

トンカラトン「二名の生存確認！ 重傷のようだが無事のようにです。すぐに搬送しますので緊急手術の準備をお願いします！」

すぐにトンカラトンの一人が100kmババアを担ぎあげて、そのまま自転車に乗る。

ソアラ「って、自転車で運ぶの!?!」

トンカラトン「途中までですよ。入り口では、ちゃんと黄色い救急車が待機してますから！」

（、、）「それはそれで違つところに連れてかれそうだな」

トンカラトン」では、ここは私達に任せて、あなた達はレースに戻ってください」

自転車に乗って戻っていくトンカラトンたち。肩には100kmババアとてけてけを乗せて……。

てけてけ「そ、その…… 違います！ わ、私はけが人じゃなくて……！」

ソアラ「ちょっ！ てけてけ？！ その子、違うから！ 要救護者じゃないから……！」

呼び止める声も空しく、トンカラトン達はあっという間にスタート地点へと行ってしまった。

（、、）「なんか、忘れられているようだけど……。大丈夫か、人面犬？」

人面犬「ほつといてくれよ……」

（、、、）「仕方ないな。このまま、ほつとくわけにもいかないし」

人面犬はかなり激しい衝突をしていたが、怪我自体はそんなにひどくなかった。かといって、そのままにしておくわけにもいかないだろう。仕方なく俺は、人面犬を車に乗せて再び走り出す。

（、A、）「それにしても…… あいつ、何を考えてるんだ？ わざと事故を起こしやがって……。そこまで勝ちに拘るようなものな

のか？」

ソアラ「……………」

(´、´、´)「ソアラ？」

ソアラ「え？ あ…… なに？」

(´、´、´)「あ、いや……………」

俺はいつもと違うソアラの様子に、言いかけた言葉が出せずに、思わず口ごもってしまう。いつもの強気な様子はまったくなく、何か、沈んだ表情をしている。自分の弱い面を見せたがらない彼女にしては珍しいことだ。

俺達は何を言うこともせず、そのまま車を走らせる。ソアラは車に乗り込んでから、ずっとシートベルトをぎゅっと握り締めたままだ。気のせいだろうか、震えているようにも見える。

そんな沈黙を耐えるのも嫌だったので、ラジオをつけると、途端にもの凄い爆音が響いてきた。

(；、A、)「な、なんだ？！ 確か、この放送ってスタート地点のだよな？ 向こうで何かあったのか？」

ペラペラ男「おおっと！ 首なしライダーのリターン・クラッシュャーが成功したことに、メンバーの首なしライダー達も大きなエンジン音やクラクションで歓喜を表している！！」

(´、´、´)「なんなんだ？ なんで、あんなに喜んでんだ？」

ソアラ「……あいつら…… 楽しんでるのよ……」

ソアラは苦々しい表情…… それとも、怒り？ 悲しみ？ 恐怖？  
色々な感情が混ざり合って、読み取れないような複雑な表情で、  
そう呟いた。

(A)「楽しんでる？」

ソアラ「勝手に暴走して…… 勝手に事故で死んで…… でも……  
まだ、走り足りない……、もっと走りたい……、なにより、自分  
達だけが事故で死んだのが気に食わない……！ そんな歪んだ奴ら  
ばかりなのよ。首なしライダーになった奴らはね！」

ラジオからは、未だクラクションや排気の爆音が鳴り響く。

(A)「あいつら…… 事故を起こして…… その痛みだって分か  
ってるんじゃない？ …… ねえのかよ！」

ソアラ「痛みを知る人間が…… 誰もが、その痛みを無くそうとす  
るわけじゃないわ……。同じ痛みを他人にも味合わせること自分で  
の痛みを無くそうとする奴らだっているのよ……」

今まで、俺の出会ってきた都市伝説ってのは、ちよつと変わった奴  
らだが、そんな嫌いじゃなかった……。けど、こいつらは…… 根  
本的に違う！

(A)「……許せねえ……！！」

ぎりりと、ハンドルを握る手に思わず力がこもる……。

ソアラ「……ちょっと…… どうしたの？」

(A)「首なしライダーの奴…… 正直、一発、ぶん殴ってやりた  
いところだけど……。 仮にも今はレースだから…… 走りでケリ  
をつけてやる！！」

俺は、車を加速させてゆく。 60…… 70…… 80…… 90  
…… 100km！ どんどんと加速してゆく！！ 速度警告音が  
鳴り響く。

ソアラ「ちょ、ちょっと！ 100km越えてるわよ！？」

(A)「人を傷つけて笑うような奴を…… トップになんかしてた  
まるか！！」

105…… 110…… 更に加速していく！ ハンドルを少し動  
かすだけで、車体が大きく動いてしまう。ただ、真っ直ぐに走るだ  
けなのに、ミスが命取りになる…… そんな恐怖が背筋に冷たく走  
る！ けど、スピードを緩めるわけにいかない！

ソアラ「いや……！」

(A)「く…… いつもと…… 感覚が違う……」

ソアラ「いや！ 止めて！ お願い！ 止めてよ！ 嫌だ……！  
怖い……！ 怖いよ……」

助手席に座るソアラは、小さく屈みこみ、震えて泣いていた……

(A)「ソアラ……？」

そのあまりの取り乱し方に、俺はスピードを落とした。

(A)「す、すまない……驚かしちゃったか？」

ソアラ「……はあっ…… はあっ……」

いつになく、怯えた様子のソアラ。これは、スピードの出しすぎが怖いとか、そんな程度の話じゃない。

完全に車を止めたものの、こうした場合はどうすればいいのか？  
情けないことに俺はおろおろとするしか出来ない。

ソアラ「ごめん……」

(A)「気にするな。俺の方こそ、悪かったな。あんなにスピードだして……」

それから、しばらく、ソアラは泣きじゃくってしまった。

そんな中、彼女はぽつりぽつりとあることを教えてくれた

ソアラ「私さ……昔……と、いつか……生きていた頃ね。……  
この車で走ってたときに……事故に巻き込まれて……死んだの……」

(A)「ソアラも……事故で……都市伝説になったのか……」

ソアラ「うん…… 事故のあとに、なんだかんだとあって、首ちよんソアラになっちゃったのよ……。正直、いきなり都市伝説になつてたときは、もう参ったわよ……。あはは……」

彼女は小さく笑うが……。それは無理に強がっているだけのものだ。痛いほどにそう感じた……

ソアラ「でね……。なんというか……。今でも、怖いのよ……。事故とか、スピードの出しすぎとか……。あの子のことを……。思い出しちゃって……。車の都市伝説になったのに、スピードが怖いなんて、変な話だけどね……」

ソアラの気持ちを知ってしまったから、もう無理にスピードを上げることができなかった。

80km程度で、ゴールへと向かっていた。レースではなく、ゴールするために走っているだけ。

(´・`・´)「……………」

ソアラ「……………」

でも……

本当は…… あいつに負けたくない……

事故の恐怖も悲しみも知っているはずなのに、自分と同じ運命のものを作り出すことに喜びを感じる首なしライダー

許せない思いは胸の中に溢れたままだった

ソアラ「……………ごめん……………」

( ) 「何を謝ってるんだよ？ ……まさか、車内でシイタケ栽培でも始めたのか？ それはさすがに困るぜ……………」

ソアラ「してないわよ！ と、いうか、どこから、そんな発想でるのよ!？」

( ) 「なら…………… マツタケでも栽培して……………」

ソアラは俺の言うことを遮り、一気にまくし立てる。

ソアラ「私も！ 私も、本当は、あんな奴に負けたくない！ あいつらを許せない気持ちは、あなたと同じよ！ でも…………… どうしようもなく…………… 怖いのよ……………」

( ) 「許せないって、その気持ちだけで十分さ。その心はレースに勝つより、ずっと大事なもんだろ？」

ソアラ「……………ごめん……………」

それは聞こえないふりをしておいた。

そのまま、しばらく走らせていると、視界の先にクラッシュしている赤い車が見えた。

( ; ) 「ま、まさか…………… □裂け女もやられたのかよ!？」

ペラペラ男「ああ、なんてことだ！ □裂け女、化粧直しの為にハ

ンドルを手放した瞬間にスリップして、壁に激突だー!!」

( ; ; 、 ) 「って、自爆かよ!? つーか、なんで化粧直しして  
るんだよ!?!」

ソアラ「……ただの馬鹿でしょ……」

冷やかな視線を送りつつ、その赤い車を通り過ぎるとき……

その影に隠れる、首なしライダーの姿が見えた

このとき、時速80km

この距離では、ブレーキをかけても、安全に止まる前に追い抜かれ  
て事故を起こす……。ほんの一瞬のことであったが、直感がそう判  
断した。

俺は、反射的に咄嗟にスピードを上げた!

ソアラ「ちよっ! な、何してるの!?!」

( A ) 「首なしライダーだ!」

ソアラ「え!?!」

バックミラーには、既に俺達の後を追いかける首なしライダーの姿  
が確認できた。既にこの車は時速100kmを越えているのに、あ  
いつは今にも追いつこう、追い越そうと距離を詰めてきている!

ソアラ「!?!」

(A)「止まったら、確実に事故だ！ 逃げ切るぞ！」

一気にスピードをあげて、俺達は逃げる。

あいつが何を考えてるか…… やつと分かった。首なしライダーは、はじめからスピード勝負をするつもりなどない。あいつの目的は、俺達全員を潰すことを楽しんでいるだけなのだ！！

(A)「くっ……！」

どンドンと加速して突き放そうとするが、奴は執拗に食い下がってくる。もしかしたら抜こうと思えば抜けるんじゃないかとさえ思えてくるほどにしつこい走りだ。

ソアラ「はぁ…… はぁ……」

(A)「くそっ！」

目の前にあるスピードの恐怖。すぐ後ろに迫る事故の恐怖。俺でも心臓が痛いほどに胸を打っているのだ。スピードも事故も、人並み以上に恐れるソアラに、この状況はあまりにも辛すぎる……。

出来ることなら、こんなレース止めてやりたい……！ けど、今、ここで止まれば、確実に事故を起こされる！

スピードを上げれば上げるほど、逃げ切つて助かる確率は上がっていく。だが、それに比例して追い抜かれたとき、事故が引き起こされたときに受けるダメージも大きくなる。生き残るには進むしかない。そんな希望と絶望の追いかけっこだ。

ソアラ「怖い…… 怖い…… 助けて……！」

涙を堪えることもできずに、顔をぐしゃぐしゃにしながら、びくびくと震えるソアラ……

(A)「ソアラ…… 安心しろ！ 俺は負けない！ あんな奴に負けたりしない！！ もう誰も泣かされたりはしない！ させない！ させてたまるか……！」

ソアラ「………」

( )「b」こんなときのために頭文字Dを読んだ俺の走りを見せてやるぜ！」

ソアラ「……ちょ…… なによ、それ…… そんなので…… 上手くなれるわけないでしょ？」

( )「……」やってみなくちゃわからないぜ？」

俺のくだらないギャグに、ソアラは少しだけ…… いつもの元気を取り戻してくれた。やはり、助手席に座るソアラは、こうでないとな！

(A)「よし！ 一気にいくぞ！」

ソアラ「う…… うん！」

一体、時速何kmで走っているのか、メーターを見る余裕はない。見るのも怖い。ただ、首なしライダーに抜かれないようにブロック

しながら、ひたすら前に進むのみだ。

それでも、バックミラーに映る首なしライダーの影は消えない。  
ぎりぎりの戦いが続く。そのときだった

激しい金属音と共に車内が小刻みに揺れる。痺れを切らしたのか、  
首なしライダーが鉄の棒で車体を叩いてきたのだ。

ソアラ「きゃっ！」

(A)「くっ！ あの野郎!!！」

一瞬だった……

ほんの一瞬…… 気が逸れた、その一瞬に……

奴は、急加速をした

俺の隣を首のない男が、駆け抜けていく

それが見えたとき、俺の体は金縛りにあい、車の制御が全く出来なくな  
った……

事故を起こす

俺の脳裏に恐怖と共に、そんな言葉がよぎった。

俺だけでないだろう……。首なしライダーも、観客達も……。誰も

がそう思ったはずだ……

窓の外の景色を凍りついた瞳で見続ける

景色は…… ずっと直線を描き続け…… 車は首なしライダーを追い続けた。

何も起きなかった。一瞬を長く感じるというのはあるが、少なくとも、痛いほどに胸を打つ鼓動が、10や20を越える時間よりは短いはずだ。

( ; ) 「ど、どうして…… 事故らないんだ？」

ソアラ「……そんなの決まってるじゃない……！」

気づいたら、助手席にソアラの姿はなかった。でも、声は確かに俺のすぐ近くで聞こえた。

ソアラ「目には目を！ 歯には歯を！ 都市伝説には都市伝説よ！ この車のコントロールを、私と完全にシンクロさせたわ！ 首なしライダーの力に影響なんて受けさせない！」

( ; ) 「ソアラ？ だ、大丈夫なのか！？」

ソアラ「あはっ！ 大丈夫…… って、ほどじゃないけど、あいつに負けたくないでしょ？」

その声は震えていた。震えを必死に押さえ込んで、明るく強気な自分を前に出しているのだ。ならば、俺がすべきことは、ただ一つ……

( 、 、 ) b「よし、いくぜー！」

ソアラ「任せて！」

金縛りが解けた俺は、一気に加速させる！ 今度は、俺達は予想外の出来事に隙だらけになった首なしライダーを追い抜きにかかる！

ペラペラ男「あーっとー！！ これはどういふことだ！？ 首なしライダーの事故フラグをまるで気にした様子もなく、逆に抜き返しかかったー！！」

風化老人「あー……… これはー……… そのー……… どういふことでしようねー？」

じりじりと、首なしライダーを追い詰めていく俺とソアラ！ 追う側の立場ってのは、こんなにもたまらないドキドキがあるものなのか？ 走り屋の気持ちも分かる気がする。

ペラペラ男「首ちゃんソアラの進路を阻もうとする首なしライダー！ 首なしライダーの事故フラグがきかないのと同様に、首ちゃんソアラのギロチン攻撃も、既に首のない首なしライダーには効かないゆえの余裕か？！」

ソアラ「だから、誰がギロチンよー！！」

( 、 、 ) 「調子が戻ってきたみたいだな？」

ソアラ「な、なによ？」

( 、 、 ) 「なんでもないさ！ さあ……… 勝ちにいくぜー！」

ソアラ「当たり前でしょ！」

ペラペラ男「凄い！ 凄い！ ついに並んだ！！ 並んだぞ、首ちよんソアラ！！ 首なしライダーはもう打つ手なしか！？」

俺とソアラの隣を走るのは、首なしライダー。こいつは、まともにレースをしたことがないのだろう。事故で相手を潰すことばかりに喜びを見出し、結果、まともに走り抜ける技術は廃れていった。今では、追われることに恐怖を感じ、余裕さえも見えない！

( ; ; ) 「今だ！ いくぜ、ニトロ・エンジンだ！！」

ソアラ「そんなのないわよ！！」

思い切りアクセルを踏み込む。ニトロはなかったが、それでも

ペラペラ男「これは、追い…… 追い…… 追い抜いたー！！」

俺とソアラは、ついに首なしライダーを追い抜いた！！

( ; ; ) 「！！」

ソアラ「！！」

人面犬「ほっといてくれよ……」

その瞬間、首なしライダーは、スピンして壁に突っ込んでいった……

( ; ; ) 「あ……」

ソアラ「……そういえば」

この車には、追い抜かれたら事故を起こす人面犬が乗っていたのだ  
った。

( ; ) 「すっかり、忘れてたー！」

ソアラ「な、なにやってるのよ!? と、とりあえず…… 助けに  
……」

そこでソアラの言葉が止まる。僅かな迷いがあるのだろう。だけど  
……

車は既に俺の意思とは別に停止を始めていた。

首なしライダーなんて、本当は見捨てておきたいところなのだが……  
……。まあ、そういうわけにもいかないか。

( ; ) 「やれやれ、大丈夫かい？」

ソアラ「見た目は重傷っぽいけど、この程度じゃ都市伝説は死には  
しないわよ。もう死んでるわけだしね」

俺とソアラはバイクの下敷きになっている首なしライダーを助け出  
す。ひどい転がり方をしていたが、燃えてたり燃料漏れなどは見受  
けられない。とりあえず引火して爆発とか、そういう危険性はない  
ので気は楽だ。

そうしているうちに救護班のトンカトンや、観客の都市伝説達が  
一斉にやってくる！

ペラペラ男「首なしライダーがリタイヤだ！！ これで走者はただ  
一組…… と、いうことは？ そう！ 生き残った首ちゃんソアラ  
が…… 優勝だー！ー！ー！ー！」

観客達『うおおおおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

そうだ、走者がいなくなつたことで、このくだらないサイバルレ  
ースは終わりを告げたんだ。

（ 、 、 ）「おいおい…… まだゴールまで行ってないぜ？」

ソアラ「いいんじゃない？ もう私は動きたくないわよ？ シンク  
口なんてしたから、もうくたくた……」

そう言うとソアラはぐったりとその場に腰を下ろす。まあ、あれだ  
け頑張ったんだから仕方ないか。

（ 、 、 ）「やれやれ」

やっと終わったと俺も安堵して座ろうとしたときだ。突如としてバ  
イクの轟音が歓声を打ち消した！ 音の主へと皆の目が一斉に集ま  
る。

（ 、 、 ）「首なしライダー？」

ぼろぼろの首なしライダーが、誰かのバイクを乗っ取って、俺達と  
向かい合う。まだ、レースを続ける…… と、いう雰囲気ではない

な。走るといふ熱い気持ちは全く感じない。ただ明確な殺意だけを  
感じとれた。

ペラペラ男「おい、もうレースは、終わっ……ぐわあっ！」

首なしライダーは、制止に入ったペラペラ男を有無を言わずに鉄  
の棒で叩いて跳ね除ける！これに危険を感じた観客達は一気に後  
ろへと退いていった。

(A)「この野郎……どこまで腐ってるんだよ？」

俺は車内から、修学旅行で買った『人の顔が浮き出た柱から削りだ  
したという、いわくつきの木刀』を取り出して、奴と向かい合う！

ソアラ「ちょ、ちょっと！なにやってるのよー！」

(、、)b「ちょっと、ぶん殴ってくるぜ！」

あいつの狙いは、俺とソアラだ。俺がやられたら、正直、誰がソア  
ラを守るんだよ？つまり、負けるわけにはいかないってことだ！

首なしライダー「……………！」

(A)「ー！」

木刀と鉄パイプがぶつかり合った瞬間……俺の木刀がへし折れ、  
刀身の半分がくるくると宙を舞った！

(；A)「おいおいおい！いわくつきのくせに滅茶苦茶、もろい  
じゃねえかー！」

俺の体勢が整う隙を与えまいと、首なしライダーはUターンして再び特攻してくる！

( ; A ) 「う…… うおおおおー！！！」

迎え撃とうと折れた木刀を構える！ やれるかどうかではない、やっつてのけるのだ！！ その覚悟の前に特攻してくる黒い影……

ソアラ「危ない……！！！」

そのとき、何者かが首なしライダーを轢いた！！

( ; ; 、 ) 「え？」

それは…… 首なしの馬に乗った首のない騎士……？ その姿は中世の騎士そのものだ。

ざわっ…… ざわっ…… その姿をみて、観客達、特に首なしライダー達が一気にざわめき立つ。

ペラペラ男「か…… 彼は……！ まさか……！」

雑魚の首なしライダーたちは、次々と画用紙に何かを書いては掲げていく。

雑魚ライダーA「あ、あれは……！」

雑魚ライダーB「かつて…… 都市伝説史上最速といわれた先代の総長・根怨出留蛇垂留死世（ネオンデルタル4世）（成仏済み）」

と唯一、互角に走りあつたという伝説の首なしライダーじゃないか  
！！』

雑魚ライダーC『間違いない！ あの姿は…… 出由良 判！！  
通称・デュラハン！！』

( ; ; 、 ) 「有名人か？ つか首なしライダーなのか？ バイク  
じゃなくてもいいのかよ？」

ソアラ「それより、あの格好で日本人つてのは、どうなのよ!？」

色々と言いたいことはあるが、出由良 判こと、デュラハンは何も  
言わない。まあ、首がないから他の首なしライダーと同様に話せな  
いのだろうけど。

デュラハンは、ずっと俺達に背を向ける。なにかと思えばマントに  
文字があつた。そこには『漢は背中で語れ!』と、達筆な字で書い  
てあつた。

( \* 、 、 ) 「……………」

ソアラ「……………」

ばさばさとひらめくマント……………。そこに書かれた『漢は背中で語れ』  
の文字……………。こゝこれはなんというか……………

( \* 、 、 ) 「格好良すぎだろ?!」

ソアラ「え?! どうして、そうなるのよ!?!」

デュラハン「……………」

俺の贖辞に、デュラハンは、ぐっとサムズアップで応えてくれた。そして、そのまま首なしライダーの前に仁王立ちになる。

(´・`・´)「奴の卑劣さを戒めに来たのかい？」

デュラハンは、ぐっとサムズアップをする。

ソアラ「なんで分かるのよ?!」

(´・`・´)「え？ 背中を感じ取れね？」

ソアラ「わかるわけないでしょ……………」

首なしライダーは怒り心頭といった様子で鉄パイプでデュラハンに殴りかかるが、鎧を着たデュラハンにそんなものは通じるわけがない。あっさりと弾き返されてしまう。

今度は逆にデュラハンの木刀が一雑すれば、首なしライダーはあっさりと弾き飛ばされてしまう。体格さがあるとはいえ、首なしライダーは相当な距離を吹き飛んだ。

ペラペラ男「おおっと！ デュラハンの木刀が、首なしライダー・現総長、珍犯児を軽々と弾き飛ばしたー！！ これは………… やはり、負けたことに対してヤキをいれているのか?!」

デュラハン「……………」

デュラハンは急にしゅんっとうずくまって、見事に落ち込んでしま

う。

ペラペラ男「あれ？ どうした？」

( 〃 〃 〃 ) 「違うだろ？ 相手を陥れるような走りをした首なしライダーを一喝したんだろ？」

デュラハンは、ぐっとサムズアップで応えてくれた。

( 〃 〃 〃 ) b 「何も言うな！」

ソアラ「何も言ってないでしょ……」

今度は俺の前にやってくるデュラハン。そして、その手の木刀を俺に差し出す。

デュラハン「……………」

( 〃 〃 〃 ) 「え？ いいのか？」

デュラハン「……………」

( 〃 〃 〃 ) 「おいおい、そんな大事なものもらえねえよ！」

デュラハン「……………」

( 〃 〃 〃 ) 「そうか、そういうことなら……」

ソアラ「って！ ちょっと！ テレパシーで会話しないでよ……！」

(´・`・´)「え？ テレパシーなんか使ってないぜ？ 漢同士は、何も言わずに通じ合えるものなだけさ」

デュラハン「……………」

デュラハンは、サムズアップをする。

ソアラ「なんで通じ合えるのよ……。と、いうか、何ていつてるの？」

(\*´`´)「一日に10体以上の呪いの藁人形が打ち付けられていた神木から削りだした、この呪いの木刀『玄翁』を俺にくれるっていうんだよ。夜な夜な、カコーン！ カコーン！ って、音がするレア品らしいぜ！」

ソアラ「ちょ！ そんなもの貰わないでよ……！」

ガーン！！ と、背景に稲妻が走るくらいにものすごいショックを受けて、俺とデュラハンが地面に屈みこむ……

(´・`・´)「えー、いいじゃんか…… ちょっとくらい、いわくつきの木刀くらいさ……………」

デュラハン「……………」

(´・`・´)「え？ やっぱ、お前もそう思う？ だよなあ？」

デュラハン「……………」

ソアラ「だから、何を話してるのよ……………」

( \* 、 、 ) 「 そうだな…… じゃあ、木刀のお礼に、車のトランクにいつの間にか紛れ込んでいた『I LOVE 世界制覇』Tシヤツをやるよ！」

デュラハン「……………」

( 、 、 ) b 「 おいおい、照れるなよ。お前なら、何着たって似合っからさ！」

デュラハン「……………」

ソアラ「……………なんなのよ、この二人は……………」

呆れた顔でソアラはため息をつくのだった。どうも、この漢本土の語らいは女の子には分からないようだ。

ソアラ「ところで……………」

( 、 、 ) 「 ん？ 」

ソアラ「無茶しないでよー！ー！」

( ; 、 、 ) 「 え？ 」

急に訳のわからないことを言って怒り出すソアラ。俺、何かしたか？

ソアラ「え？ じゃないわよ！ バイクに乗った首なしライダーに木刀一つで挑んだりして……………」

( ˘ ˘ ) 「あー…… あれか。あれくらい、なんてこと……」

ソアラ「なんてことあるわよ！」

俺が反論するよりも先に、怒声を浴びせかける。

ソアラ「私はあいつに殴られたって死ぬことはないわ！ そりゃ、ちよつと痛いだろうけど。でも…… あなたはそうはいかないじゃない……」

簡単には死なない……。それは、100kmババアに人面犬、首なしライダー、口裂け女のタフさを見ればわかる。だが俺は、生身の人間はそうはいかない。そんなこと今まで考えたことなかったが、すぐに分かることだ。

( ˘ ˘ ) 「だからって、見捨てられるものじゃないだろ？」

ソアラ「……！」

一瞬、真っ赤になって何かを言おうとするソアラだったが、それを飲み込みそっぽを向いてしまう。

( ˘ ˘ ) 「ソアラ？」

ソアラ「……バカ！ 今度、同じことしたら…… 口きいてあげないからね……」

( ˘ ˘ ) 「やれやれ…… まあ、善処するわ」

ソアラは、人波から少し離れたところへと出る。色々と胸にたまった思いを夜風が冷ましてくれるように感じていた。

一人、心を落ち着けるところへ、聞きなれた抑揚のない呼び声がする。

メル「ソアラ……」

ソアラ「何？」

メル「ソアラは……泥棒？」

突然、わけのわからないことを言い出すメル。なんだかんだと会話の順序がとんでもない方向から入るのだ、この子は。

ソアラ「はあ！？ ちょっと、急に何をいつてるのよ？」

メル「うそつきは……泥棒の始まりって……姉様が言った」

ソアラ「嘘って……」

そこでソアラは、むぐっと口を塞いだ。

メル「都市伝説は……実体化を解けば、物理ダメージを受けない……。けど……都市伝説同士だったら……それは関係ない……そう、本に書いてあった……」

ソアラ「……………」

メル「首なしライターに殴られたら…… ソアラは…… 痛いだけで済む？」

その質問にソアラは、片手をぱたぱたと振って、そっぽを向いてしまふ。

ソアラ「さあて…… ね。どうだったかしら？」

メル「……………」

ソアラ「あと…… ライターじゃなくて、ライダーだからね！ ま、どっちでもいいけど……………」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9367z/>

---

流転恐怖 傑作選 『首都高最速都市伝説決定戦』

2011年12月29日10時49分発行